

巻 頭 言

2050年。日本政府が打ち出した「CO2排出量を0にする」という目標はこの年が期限です。またこの年あたりで、シンギュラリティ (singularity) が起こるのではないかという人もいます。「特異点」と翻訳されるこの語は、主に物理学で使用される言葉で、従来の基準 (物理法則) が通用しなくなるポイントを意味しますが、最近では技術的特異点として革新的な技術の実用化により、従来の社会、経済、環境が激変するポイントとして使用される例が多いようです。その中でも「AI (Artificial Intelligence、人工知能) が人間の知的生産活動の能力を超える時点があるのか、またそれはいつか」が最大の関心事となっています。

30年。今年が2050年までの30年の最初の年になります。まだ遠い未来のようでもあり、また私は既にこの世にいないかもしれないですが、現在学業に励んでいる児童・生徒・学生の多くは社会の中核を担っていると思われます。予想のつきにくい30年後を頭におきながら教師の多くは日々、「今、伝えるべきことは何か、身につけるべき資質や技能は何か」を問うています。30年後の未来を考える時、過去の30年間を振り返ることは有用です。そこで今から30年前 (1990年) を振り返ってみます。インターネットを通じたe-mailが使われ始めました。またwww (world wide web) プロトコルを用いて世界の人々の発信する情報をキーワードで検索・閲覧できるようになったのもこの頃です。しかしその使用は、大学や研究所などの一部の人間に限られていました。私もe-mailで作った文書を相手先のFaxに送信していました。通信もアナログ回線のトーン信号でしたので極めて遅く、この文章の容量でも数十秒かかりました。その後、1995年のWindows95の発売を経てインターネットは一般化し、通信もまずは電話からラジオ・テレビへとデジタル化されて高速になっていきました。固定電話が主流だった通信デバイスも今では携帯型のスマホとなりました。日本においては気付きにくいですが、世界最貧国と言われる国々でもスマホは普及しています。思えば過去30年間にも大きな変革があり、その中で新しい技術が基盤となる産業界も激変しました。

30年。これは人間という種の1世代です。一つの個体が子供を生み出し育み、その子供がまた新たな子供を生み出すサイクル (生活環, Life Cycle) に必要な時間です。私の専門の海洋分野でも、様々な海洋生物の生活環を基に保護・保全策を立案しなければなりません。そのように考えると、まだ若い次の世代の担い手への指針を示すことは現世代の義務でもあります。これまでの30年間の経験や知識は参考にはなりますが、それだけでは次世代が露頭に迷ってしまうかもしれません。我々はこれからの

30年間をできる限り見通し、その中で必要な資質・能力を若い世代が身につけるお手伝いをしなければなりません。今、公立鳥取環境大学地域イノベーション研究センターではこの難しい課題に正面から対峙しているつもりです。

2050年。その時にはAIが人間を管理し、人間はAIが指示するように行動しているでしょうか。今の日本では、生涯の伴侶をAIに決めてもらうビジネスも流行っていると聞きます。しかし私は、人間の情感や不合理な行動をAIが完璧にフォローできるとは考えていません。それは私が長年研究してきた海洋生態学の中で、生物が必ずしも科学的合理性に基づいた形態や行動をとらないことを経験したうえでの考察です。現在生きているすべての生物は、生物進化の壮大な実験場の中で個体の些細な違いからくる思いがけない行動を通して、予測が不可能（いわゆる想定外）な事態に対処して生き残ってきたのですから。

本年度の地域イノベーション研究センターの報告では、次の30年間に立ち向かうための何らかのヒントを与えてくれるテーマが並んでいます。ぜひ、ご参考にして下さい。

令和3年5月

地域イノベーション研究センター長 吉永 郁生